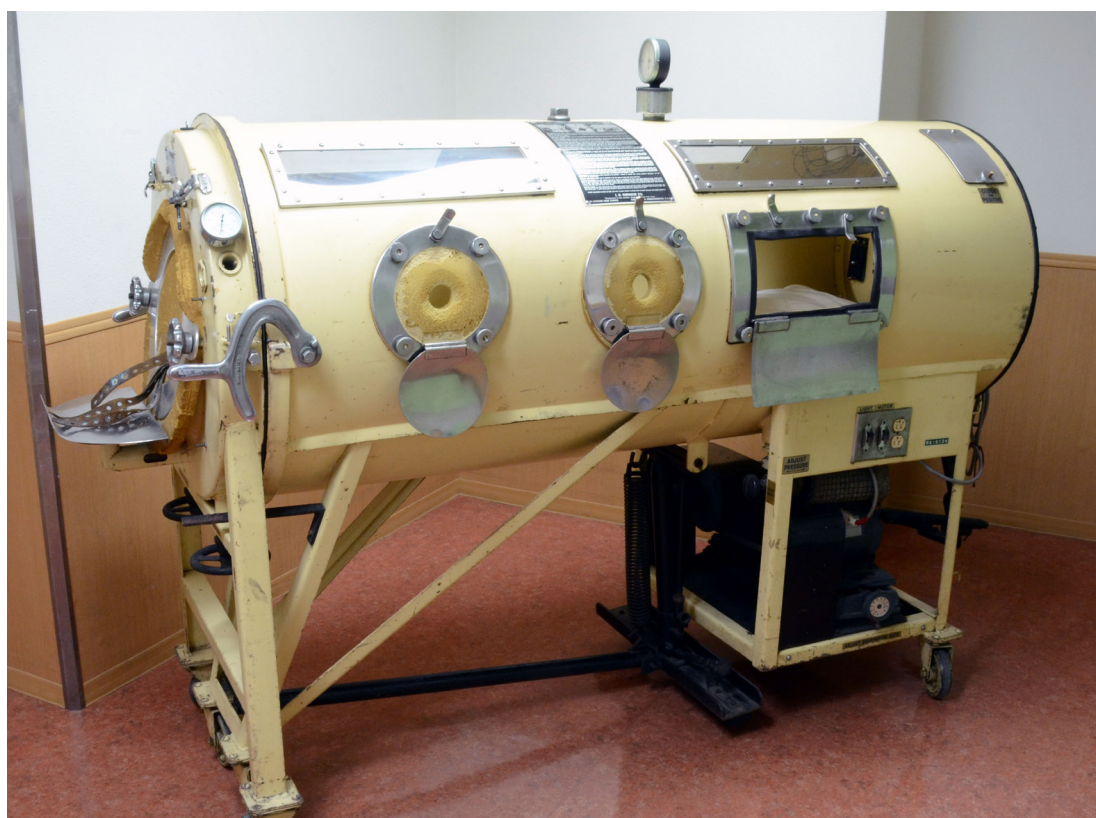


March 2015

京都大学総合博物館 ニュースレター



医学史展「医は意なり一命をまもる 知のあゆみ」で展示中の「鉄の肺」(本文 pp.2-3, 参照)。

第 29 回日本医学会総会 2015 関西 医学史展

「医は意なり一命をまもる 知のあゆみ」.....	2
特別展「文化財発掘—京大キャンパス出土の埴輪—」.....	4
ベトナム科学技術アカデミーの副院長ら来訪.....	5
「はやぶさ 2」打ち上げパブリックビューイング.....	6
特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて～」.....	6
ロビー展示報告：エンセーテをめぐる人びとの知恵と創造.....	7
第 4 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム.....	8
東日本大震災からの生活文化の復興.....	9
最初の企画展『京都大学の遺伝子研究』のころ.....	10
荒勝文策関係資料：サイクロトロン破壊時の日誌.....	11
総合博物館日誌.....	12

第 29 回日本医学会総会 2015 関西 医学史展

「医は意なり—命をまもる 知のあゆみ—」

開催期間：2015 年 2 月 11 日（水）～4 月 12 日（日）

2015 年 2 月 11 日（水）～4 月 12 日（日）まで医学史展「医は意なり—命をまもる 知のあゆみ—」（主催：第 29 回日本医学会総会 2015 関西，共催：京都大学総合博物館）を当館 2 階企画展示室にて開催しています。本展示は 4 月 11 日（土）～13 日（月）に京都でおこなわれる「第 29 回日本医学会総会 2015 関西」の関連イベントとして開催しています。

例えば、怪我をして病院に行ったとき「お医者さんに診察と治療をしてもらい、看護師さんに手当をもらい、必要に応じて薬を処方してもらい、治療費を払う」一見、当たり前の過程ひとつずつに歴史がつまっています。ケガを治すために必要な薬や技術はどのように開発されてきたのか。ケガの状況を適切に診断し、治療方針を決めて治療にあたる医療従事者になるためには、どのような知識や技術を身に着ける必要があるのか。治療方法や技術があっても、莫大な料金がかかるのであれば、1 人でも多くの人々がそれらを受ける機会を得るためにはどのように対応をすればいいのか。

また、医学や医療が発展することで、生物としての寿命を延ばせるようになったけれど「人間らしい生活」とは何なのか？等、考えなければならない問題が生じています。

展示のタイトルである「医は意なり」とは、医学に携わる者の中で戒めの言葉として古くから大事にされ

てきました。しかし、この言葉の「医」は医療従事者のことだけを指しているわけではありません。自分だけではなく、大切な人が病気やケガをした時にそれらにどのように立ち向かうのか？病気やケガと対峙するすべての人に向けられた言葉です。今受けることができる医療は、医療従事者の努力だけではなく、医療従事者を支える技術やそれらを受ける人達の「少しでも心身ともに健やかに過ごせるように試行錯誤してきたことの積み重ね」でもあります。

それらを踏まえて、本展示は 1) 関西を中心とする明治以前の医学史 2) 近代医学・医療の発展 3) 社会保障制度の歴史 4) 医学教育 5) 生命・生命倫理 6) 看護 7) 助産 8) iPS 細胞についての 8 章で構成しています。本文では、その中でも主な見どころ 4 点を紹介します。

見どころ：1「関西を中心とする明治以前の医学史」

主に京都にゆかりのある著名な医学者 12 名と一族の功績をパネルと関連資料で紹介しています。京都大学附属図書館の協力を得て、山脇東洋（1705-1762）の「藏志」や小石元俊（1743-1808）が腑分け（解剖）の指導をおこない作成された「施薬院解男体図」（三雲環善編・吉村蘭州画）を展示しています。

また、京都で禁裏御典医をする傍ら、分家を立てて「民間医療」に携わり、臨床経験を積み重ねてきた百々



展示場入口



「関西を中心とする明治以前の医学史」全景



血圧計とガストロカメラの展示

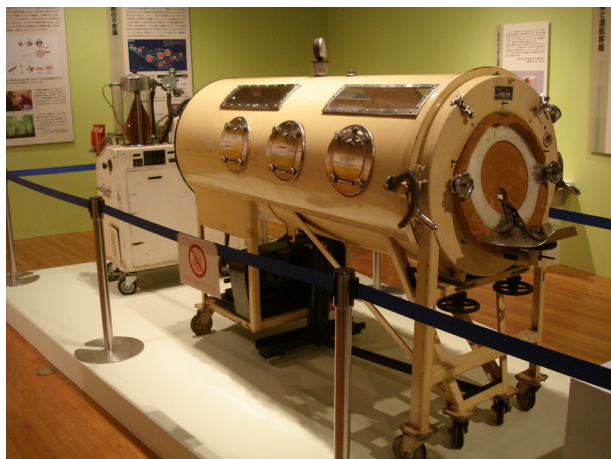
家に残る「百々漢陰・鳩窓父子の1838・39年「診療人名録」(個人蔵)」では、1838～39年の診療記録から当時どのような人が、どのような病気で診察に訪れているかをご覧くださいことができます。

見どころ：2「近代医学・医療の発展」

明治以降に日本人研究者によって発見や開発をされた薬や技術についてパネルで紹介しています。胃カメラ「ガストロカメラGT-PⅡ(財団法人 日本医科器械資料保存協会・蔵)」や「家庭用血圧器の変遷(協力：オムロンヘルスケア(株))」など、一般の方にも比較的馴染みのある医療機器を紹介しています。

見どころ：3「生命・生命倫理」

医学・医療が発展することで、今まで治らなかった病気が治せるようになり、また、身体的な苦痛を和らげることができるようになりました。今回、展示している「鉄の肺(静岡市立静岡病院蔵)」という人工呼吸器は、日本でも1960年代はじめまでは100台以上存



鉄の肺

在していました。鉄の肺は、ポリオ患者の呼吸改善に使用され、この中で60年近く一生を過ごした方もおられます。一方、発達した技術が、人の尊厳の領域に大きく踏み込み、人の生死や誕生などを巡る倫理について様々な課題も生じており、国民全体で考えなければならない課題が多くあることもお伝えしています。

見どころ：4「助産」

「産婆から助産師へ」「お産の今昔」「子産み子育てと社会」の3つのテーマで構成しています。「産婆から助産師へ」では、産婆が資格化された明治時代から現代の助産師さんの活躍までをパネルや資料を用いて紹介しています。特に昭和11年に京都で開催された「第9回大日本産婆大会」の資料(京都府助産師会蔵)から当時の産婆さんたちの活躍を伺うことができます。また、「子産み子育てと社会」では、大原神社の協力を得



助産コーナー全景

て「家庭教育双六(大正時代)」「や「愛育茶談(江戸時代後期の育児書)」等を展示しています。これらの資料から大正時代の社会背景や江戸時代の育児についてご覧いただけます。核家族化して子育ての情報が共有されなくなった今日、妊娠、出産、そして幼児の健やかな成長を一緒に見守ってくれる助産師さんの役割が今後急速に再評価されるのではないかと予感されます。

展示をご覧いただいた方々に展示のサブタイトルである「命をまもる 知のあゆみ」を少しでも感じ取っていただければ幸いです。また、本展示を開催するにあたりご尽力いただいた展示委員会の先生方をはじめ、展示資料や画像提供にご協力いただいた皆様に感謝致します。

(総合博物館特定研究員 中川千種)

特別展

「文化財発掘—京大キャンパス出土の埴輪—」

開催期間：2015年2月18日（水）～4月19日（日）

京都大学吉田キャンパスのほぼ全域が「周知の埋蔵文化財包蔵地」（文化財保護法第93条）として法律により保護の対象となっていることをご存じだろうか。「埋蔵文化財包蔵地」とは、過去に生きた人間の生活痕跡のある土地、考古学でいう「遺跡」のことである。「遺跡」は、ひとたび破壊されれば、その土地に埋蔵された情報は永遠に失われる。そのため建物建設などによって遺跡が失われる場合には、発掘調査などで記録保存に努めるとともに、時によっては計画を変更し、地中に遺跡を保存するなどの方策をとっている。

文化財総合研究センターは、大学構内の地中に眠る埋蔵文化財を中心に、その調査・分析から保管・活用にいたるまで、総合的な研究を実践している。前身である埋蔵文化財研究センター（2008年4月、文化財総合研究センターに改組）が設置されたのが1977年。以来、35年以上にわたり、延べ100,000m²に及ぶ埋蔵文化財の発掘調査をおこなってきた。この結果、吉田キャンパスには、京都大学第11代総長であった濱田耕作が1923年発見した北白川追分町縄文遺跡（北部構内）をはじめ、弥生時代前期の水田遺構（北部・吉田南構内）、古代・中世の梵鐘鑄造遺構（吉田南・医学部構内）、近世の白川道（本部構内）、幕末の藩邸跡（本部・北部構内）など、多種多様な遺跡が存在していたことが明らかになってきている。

今回の特別展では、吉田南構内の国際交流会館建設に先立って、2011年に調査された古墳時代資料を展



形象埴輪（馬・人物・家）

示する。この調査では、墳丘の失われた古墳の溝から多量の円筒埴輪とともに馬形・家形・人物といった形象埴輪などが出土した。破片で出土したそれらを1点1点、出土位置を記録して取り上げることで、埴輪はどうやって破片になって埋没したのか、墳丘はどう崩壊したのか、という課題に挑んだ。復元展示されている埴輪は、造形的にみても興味深いものであるが、破片1点1点が語りかける意味にこだわる考古学の作業の一端にも触れていただけたらと思う。

吉田南構内で今までに発見された古墳は9基あるが、埴輪をともなったのは、この8号墳だけである。吉田二本松古墳群における8号墳の位置づけを考えるために、これまでに見つかった古墳出土資料からも参考資料を展示することにした。

今回の展示では、古墳時代に焦点を絞ったため、膨大に蓄積されている出土文化財のごく一部を展示するにすぎないが、このささやかな展示を通じて、京都大学のキャンパスにも地域の歴史を解明する上で重要な埋蔵文化財があることを知っていただき、しばし過去に思いを馳せる機会となれば幸いである。

今回の展示にあたっては、企画の段階から総合博物館の全面的なご協力をいただいた。それなしでは、本特別展はなしえなかったことを記して、関係各位に厚くお礼申し上げたい。

（文化財総合研究センター准教授 千葉豊）



埴輪の調査風景

ベトナム科学技術アカデミーの副院長ら来訪

2014年11月28日（金）



ベトナム科学技術アカデミー（The Vietnam Academy of Science and Technology, VAST）副院長 Nguyen Dinh Cong 教授，ベトナム国立自然博物館館長 Nguyen Trung Minh 准教授ら9名が来学しました。ベトナムでは現在大規模な国立博物館の設立が計画されており，今回の訪問も日本の主要博物館の視察が目的で，2014年11月23日に来日後，国立科学博物館，神奈川県立生命の星・地球博物館，茨城自然博物館を経て，28日に京都大学総合博物館に来訪しました。

当日は，来学後初めに時計台記念館迎賓館にて京都大学国際交流推進機構長 森純一 教授と，総合博物館館長 大野照文 教授らによるレセプションが行われました。ここではベトナムと京都大学との交流実績の紹介や，大学や博物館を通しての科学教育，生涯学習を行っていく上での意見交換などが成されました。また，歓迎会の最後には，親交の印として両機関による記念品の交換が行われました。



森純一教授（左）と Nguyen Dinh Cong 教授（右）による記念品交換

歓迎会後，一行は総合博物館に移動し，大野館長，本川雅治 准教授らの案内のもと，展示室や収蔵室，および資料保存に関わる設備などの視察を行いました。ここでは特に，高温多湿な東南アジア地域での収蔵物保存において重要となる，温度・湿度管理に関する設備に興味が集まりました。また，学術研究用のみならず，教育用や医学利用の観点からも価値のある収蔵物の解説等に関心が寄せられました。

博物館視察後は，吉田泉殿にて昼食会が開かれました。その後，一行はベトナムでの野外調査において VAST と交流のあった京都大学理学研究科 中野隆文 博士と合流し，筆者やベトナムより留学中の Nguyen Thien Tao ベトナム国立自然博物館自然保護部部長らと共に京都市内の文化遺産を視察したのち，大阪へと移動，翌29日に帰国しました。この訪問を通じて，両機関の交流が活発化し，また博物館学への理解が深まることが期待されます。

（京都大学総合博物館博物館研究員 江頭幸士郎）



収蔵庫の解説をする大野照文館長

「はやぶさ2」打ち上げパブリックビューイング @ 京都大学総合博物館

2014年12月3日(水)



日本中を沸かせた探査機「はやぶさ」の劇的な帰還から4年。総合博物館でのカプセル展示もまだ記憶に新しいなか、小惑星探査機「はやぶさ2」の打ち上げパブリックビューイングを総合博物館ロビーの特設会場で実施しました。二度の打ち上げ日の変更にもかかわらず、当日は学内外から100名近い来場者がつめかけ、ロケット26号機による「はやぶさ2」打ち上げを見守りました。

パブリックビューイングは、種子島宇宙センターからの中継映像をスクリーンに投影し、宇宙総合学研究所のスタッフの企画進行のもと、理学研究科地球惑星科学専攻の伊藤正一准教授による解説をまじえて実施されました。来場者によるカウントダウンに続

いてロケットが射出されると、会場から一斉に拍手と歓声が湧き起こりました。

特設会場には、理学研究科地球惑星科学専攻 土山研究室による「はやぶさ」が持ち帰った分析サンプルモデルやパネルが展示され、大学院生による解説が行われたほか、隠れ宇宙ファン(?)の学内職員の提案で「はやぶさ2」塗り絵コーナーも設けられて、幅広い年齢層からなる来場者との交流を楽しみました。

「はやぶさ2」は打ち上げ後も順調に航行を続けています。2020年のミッション終了後の帰還、そしてもたらされる科学的成果を皆さまとともに期待して待ちたいと思います。

(宇宙総合学研究所ユニット特定助教 山下俊介)



塗り絵コーナー

特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて～」

2014年12月10日(水)～2015年1月25日(日)

小学校から高校まで、学校現場における「探究活動」の事例を集めて開催したのがこの特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて～」である。観察、推理、そして仲間との対話を通じて新たな発見に挑むのが探究活動で、児童・生徒の能動的な学習態度の涵養を目指している。本展示の狙いは、現場の先生方やそれを支える地域住民、あるいは大学関係者により良い探究活動を行っていただくための参考事例を示すことである。

総合博物館の連携ネットワークで出会った9校の特色ある事例を取り上げ、探究活動の具体的な取り組み、教師の工夫、地域の支援などについて紹介した。入り口には、探究活動の今日的意味を示すため、知識偏重と体験重視の間を揺れ動く日本の学校教育の歴史年表を掲げた。また、広い意味での探究活動である大学で

の研究についても、フィールド科学教育研究センター特定助教の市川光太郎博士に、ジュゴンの研究を紹介してもらった。さらに、教員になるため、教育実習を終えた学生に課せられた教職実践演習を受講している京大生にも、教育実習の経験と自分たちが学校で学んでいたときの体験をもとに、「探究とは何か」を探究してもらい展示した。この演習では、教育学研究科大学院生の渡川智子さん、農学研究科大学院生の佐藤あさひさんがTAとして指導に当たってくれた。

今回の展示のハイライトは、長野県の標高900mの山の上にある小さな小学校、松川東小学校の探究活動であった。「探究活動の遺産」というタイトルで展示したこの学校の探究活動は、30年前、教員であった手塚恒人氏により開始され、氏の転勤後も今日まで途切れずに続けられてきた。手塚氏は、教員生活の初期の頃、



総合博物館の展示場で調べ学習の成果を発表する松川東小学校の子どもたち

東京大学に内地留学、ひたむきな研究者の姿に触発され、松川東小学校で調べ学習、つまり探究活動の実践を開始された。展

示された成果からは、しっかりした理念と方法論に裏付けられ、豊かな自然に囲まれた少人数の学校の利点を生かして生徒の個性を引き出した探究活動 30 年間の蓄積の重厚さを感じずにはおれない。残念なことに、

学校自体は少子化により今年度で閉校する。

展示に取り上げた学校生徒による会場での活動成果発表のほか、京都市立堀川高校で探究活動を推進した元校長・荒瀬克己氏、「仮説実験授業」で有名な伝説の教育学者・板倉聖宣氏らを迎えたワークショップ、シンポジウムを数回にわたって開催し、展示の意図をより明確に伝えた。なお、この展示は、日本財団、船の科学館・海と船の科学館ネットワークよりの助成をうけて実現した。記して謝意を表したい。

(総合博物館長 大野照文、教育学研究科大学院生 蒲生諒太)

ロビー展示報告：エンセーテをめぐる人びとの知恵と創造

2015 年 1 月 21 日 (水) ～ 2 月 8 日 (日)

エンセーテは、エチオピア起源のバショウ科の植物 (*Ensete ventricosum*) である。バナナに姿かたちがよく似ており、その草丈は 3 ～ 5 メートルにもおよぶ (写真 1)。エンセーテは 3 ～ 12 年に一度開花する。エチオピア南部に暮らす人びとは、エンセーテが開花するまえに、根茎部にある成長点をくりぬいて不定芽を誘導して苗をつくり、それを庭畑に移植する。彼らは、エンセーテの偽茎や根茎部にふくまれるデンプンを発酵させてパンにして主食にしているほか、葉や葉軸を葬儀などの儀礼に利用するなど宗教的な資源としても利用している。エンセーテは、世界各地に自生しているが、エチオピア南部でのみ多目的有用植物として栽培されている。

京都大学では、1960 年代後半からエチオピアの生態・社会・文化を対象にして霊長類学、生態人類学、栽培植物起源学などの研究を中心にフィールド調査が行われてきた。1980 年代には、重田眞義 (アフリカ地域研究資料センター・教授) が、日本ではじめてエンセーテの民族植物学的、遺伝資源学的な研究に着手した。当時エンセーテの在来種は 100 を超えていたが、2000 年代には品種数や個体数が減少していることが確認された。

そこで、この地域で調査をつづけてきた京都大学の研究者と地元の人び



写真 1 開花前のエンセーテをたおしている様子 (撮影：金子守恵, 2012 年 7 月)

とが協働して品種多様性保全に関わる実践的な地域研究 (21 世紀型地域研究) に着手した。この活動では、2008 年から村役場が提供してくれた共有地に地元の人が寄付してくれた苗を植え付けて、村人と研究者がともに品種を保全管理している。2012 年からは、地元の学生を中心にエンセーテの繊維や葉を使った製品開発グループが結成された。このグループの学生たちは、多摩美術大学や京都大学の研究者とともに観光客向けのエンセーテ紙の製作と販売を行っている (写真 2)。その収益はすべて学生たちの教育費に使われている。

展示の最終日に開催したサロントークでは、地元の



写真 2 地元の学生たちがエンセーテ紙を天日干している様子 (撮影：金子守恵, 2014 年 8 月)

学生たちが描いたエンセーテに関わる 23 の生活場面についての絵にふれながら、エンセーテとともに暮らす人びとの生活について紹介した (写真 3)。そのときに、エチオピアから日本の大学院に留学している女子大学院生がコーヒーセレモニーを実演し、30 人以上の来場者にエチオピアコーヒーを楽しんでもらうこともできた。

(人間・環境学研究科 助教 金子守恵)



写真 3 学生たちが描いたエンセーテの絵を説明している様子 (撮影：高野紘子, 2015 年 2 月 8 日)

国際シンポジウム

第4回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム

2014年12月18日(木)～21日(日)



京都大学総合博物館が主導する、日本学術振興会（JSPS）研究拠点形成事業による国際シンポジウム The 4th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity が、2014年12月18日から21日の四日間にわたって、マラヤ大学（クアラルンプール、マレーシア）で開催されました。このシンポジウムには、アジアの7ヶ国より約60人の陸上脊椎動物研究者、および各国の学生らが参加し、生物多様性に関する研究発表や情報交換が行われました。

シンポジウム初日にあたる18日は、宮川眞喜雄 駐マレーシア特命全権大使やマラヤ大学副学長 Mohd Amin Jalaludin 教授らによる歓迎の挨拶に始まり、続いて松井正文 京都大学教授と Yong Hoi-Sen マラヤ大学教授による二題の特別講演が行われました。その後、初日から二日目にかけて、陸上・陸水脊椎動物の多様性に関する口頭・ポスター発表が行われました。発表内容は多岐にわたっており、基礎的なインベントリ調査や生態調査の報告から、進化学や遺伝学などに関する研究に至るまで、約40題の発表がなされ、さらに各発表後の質疑の時間にも多くの意見が飛び交うなど、非常に活発な研究発表会となりました。

二日目の19日には、全ての研究発表終了後に、Rosli Bin Hashim マラヤ大学教授や京都大学総合博物館館長 大野照文 教授、本川雅治 准教授ら5人のパネリストを中心とした総合討論の場が設けられました。ここでは研究発表全体に関する意見交換の他、今後国際的な研究を進めていく上での課題や、それに対してこうしたシンポジウムがどのように貢献できるかといったことなどが議論されました。例として、生物多様性条約によって定められた遺伝子資源の均等配分に関する規定、Access and Benefit Sharing (ABS) 実施

が国際的な研究の障害となる可能性と、それについて各国の研究者・研究機関はどのように対処すべきかが議題に上がりました。ABSは、その実施によって研究用の標本・遺伝子サンプルの国を跨いで移動が今後大きく制限されると考えられることから、日本国内でも最近頻繁に議題に上がる案件ですが、今回の総合討論において、

こうしたシンポジウムを通じて信頼できる研究者ネットワークを構築することが一つの打開策となるのではないかとの意見が得られました。また一方で、マレーシアにおける動物学研究の先駆者のひとりである Lim Boo Liat 博士からは、そうした研究遂行上の課題はあるにしても、研究の基礎となる標本の収蔵を途切れさせてはならないとのコメントを頂きました。

また、20日、21日には、ウル・ゴンバック フィールドステーションにて、野外調査を主とするエクスカーションが行われました。ここでは、熱帯雨林の高い生物多様性に直に触れることができたほか、各分野・分類群の研究者が現地での野外調査に関する知識・技術を互いに共有し合うことで、参加者全体の調査レベルの向上が図られました。さらにこうしたシンポジウムや共同調査を経験することで、今後国際的な研究を展開していこうと考えている各国の若手研究者間の関係が強化されるなど、有意義な会となりました。

（京都大学総合博物館博物館研究員 江頭幸士郎）



Yong Hoi-Sen 教授（左）と松井正文教授（右）による特別講演

レクチャーシリーズNo. 131

東日本大震災からの生活文化の復興 —人々の心をつなぐ“語り”と文化財の役割—

2015年1月17日（土）

2011年の震災当初より、東北学院大学は被災した博物館のコレクション等を救援する文化財レスキュー活動に深く関与してきました。担当は牡鹿半島の突端部で10メートルを超える津波で壊滅した、石巻市牡鹿公民館とその所管する鮎川収蔵庫の民俗資料です。学生たちによる洗浄、脱塩、殺虫、写真撮影、リスト作り等の作業によって、この春ようやく保全作業を終えて石巻市の仮収蔵庫に返却するまでに至りました。その過程で継続してきた被災地での移動博物館では、民具や古写真から思い出される地域の方々から日々のくらしのエピソードや思い出を聞き書きし、そのデータは1000件以上となっています。文化財を返却した後も、この活動は継続していきます。

被災地で文化財レスキュー活動を展開しながら、私たちは日々うつりかわる地域の現状を肌身で感じてきました。人々の震災前のくらしに対する思いや、過去を振り返ることの意味は、復興状況の推移に応じて変化してきています。東日本大震災は人命と生活の場をかつてない規模で喪失させました。その震災の「記憶」が薄らいでいくのに抗うために、多くの記録のプロジェクトが進行しています。しかし、私たちの活動は、震災時の出来事ではなく、これまで営まれてきた“ひとり一人のくらし”を対象としています。

学生たちとともに聞き書きを続けてくると、震災だけが生活を変化させたのではなく、地域の開発や幹線道路の整備、商業捕鯨の禁止、養殖業における流通のグ



1月17日に開催した東北学院大学4年生による
ポスター発表の様子

ローバル化、農林水産物の生産の政策的な転換など、多くの要素が、ひとり一人の生活のミクロな現場に作用して生活を変化させてきたことがわかります。また災害についても、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波、平成の東日本大震災の津波と、それぞれに異なる被災状況と、そこからの復興過程があることがわかります。人々は、こうした試練に向き合うことで、人生を歩み、生活を営み、思い出をはぐくんできたのです。

こうした当たり前のことが、災害と復興だけに焦点を当てて見てしまうと、見えなくなってしまう。被災地を「災害」を「被った」地域としてとらえてしまうと、そこに営まれ、これからも新たな歩みをつづけていく、生活の場として見ることを忘れてしまいます。レスキューされた民俗資料と、それをもとに地域のみなさんが思い出して語るくらしの息吹が、復興のなかで作り上げていく“ひとり一人のくらし”のイメージとして共有され、生活文化の復興の一助となること。そこに人々の生活を見つめる民俗学の役割と、ミュージアムのこれからのすがたがあると実感しています。

（東北学院大学文学部准教授 加藤幸治）



鮎川での聞き書きの様子（2014年8月）

この記事は1月17日に当館で実施したレクチャーシリーズNo.131の講演内容に沿った解説です。

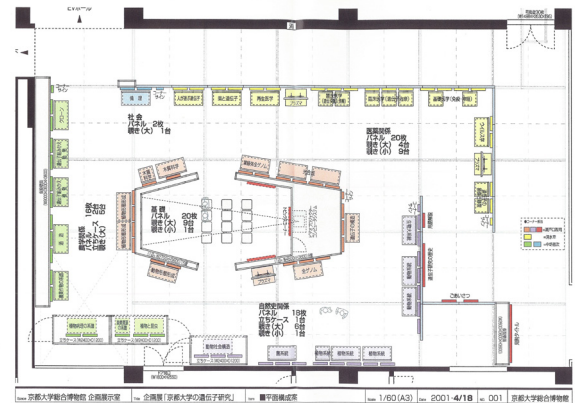
定年退職を迎えるにあたり

最初の企画展『京都大学の遺伝子研究』のころ

総合博物館に在籍して18年になる。農学部で魚類学をやっていたころ、私が博物館で展示というものに関わるとは思ってもみなかった。ふとしたきっかけで、河野昭一先生（初代館長）の知遇を得、設立の準備委員を経て、総合博物館の教授として農学部から移ってきた。学生と院生の教育と研究という役目はそのままであったが、博物館の教員として、京都大学の他の部局とは少し違った経験をさせていただいた。

博物館に在籍する研究者は、所蔵された学術標本の管理だけでなく、それらを用いた研究を行う。それだけでなく、学術標本に関する展示をするという大切な役目を担っている。展示というものは、見る側と行う側では全く違う。魚類分類学をやっており、内外の自然史系の博物館などで学術標本の所蔵と管理については理解をしていたのだが、展示のことはまったく無知であった。

それが、2001年の総合博物館オープンに合わせた企画展の担当を頼まれたのである。二代目館長の瀬戸口烈司先生からの要請であった。オープンまで、6か月を切っていた。待たなすで、未経験のことをやることになった。博物館に学内のあちこちから収納した学術標本の詳細を把握しきれなかったときだったので、何をどのようにみせたらいいのか、考えあぐねてしまった。しかし、展示をみにきていただく人から



企画展会場の平面図

すると、担当者の状態など何の関係もない。言い訳はきかない。

さて、どうするか。京都大学にはいろいろな研究室がある。そこでは様々な研究がおこなわれている。それを見ていただこうと思った。テーマを遺伝子に関した研究として、これに関係している研究室に参加していただくことにした。遺伝子研究は理学部、医学部、農学部の様々な研究室で行われており、成果があげられている。こういった研究の最前線を展示するのである。最初の企画展『京都大学の遺伝子研究』のコンセプトは京都大学の研究を一般の人たちにみていただくことであった。

関連のいろいろな研究室に展示をよびかけ、参加していただいた。何回か話し合いをして、表現する情報を決めさせていただいた。そして、それぞれの研究をパネル1枚にまとめるという無茶を聞いていただいたのである。研究に関連した物も展示していただいた。企画展だから図録を配布しなければならない。総合博物館の竣工式展は2001年5月30日、この日に参列していただく方々に図録を持ってかえっていただくのである。あらたに稿をおこしていただく時間はなく、パネルをそのまま落とし込んだ図録を作製した。

これをやりながら、大学博物館の展示はモノを見せるだけではないことを知った。モノであれ、知見であれ、学術活動を見せる。これが大学博物館の原点だと思ったのである。それは研究である。これがないと、大学博物館の活動が枯れてしまう。3月末で定年退職を迎えるが、総合博物館に在籍した出発点のころ、いい経験をさせていただいたと思っている。

（総合博物館教授 中坊徹次）



『京都大学の遺伝子研究』の図録表紙

研究資源アーカイブ通信

荒勝文策関係資料：サイクロトロン破壊時の日誌

荒勝文策は1936年から1950年まで京都帝国大学理学部物理学科の教授をつとめた物理学者で、日本における原子核物理学の基礎を築いた人物の一人として知られているが、これまで荒勝に関する資料はあまり公にされていなかった。この度、荒勝家に保管されていた資料がご遺族のご厚意により京大総合博物館に寄贈され、その整理がほぼ終了した。

荒勝は1934年コッククロフト・ウォルトン型の粒子加速器を建設してアジアで初めて加速器による原子核反応の研究を始めた。

第二次大戦中、荒勝は海軍から原爆の開発を依頼されたが、原爆製造には直接結びつかない原子核反応の基礎的研究に力を注ぎ、数々の重要な成果を上げたことが米国の公文書館などに保管されている資料などから明らかになった。

さて、日本の敗戦にともない、占領軍は京大の原子核研究室を徹底的に搜索し、京大で建設中だったサイクロトロンを破壊する。その時に書かれた荒勝の日誌がこの度寄贈された資料の中から発見されたのでその一節を紹介しよう。「・・・其時該通訳ハ『アナタニ取ッテモ亦私ニ取ッテモ悲シムベキ事ヲ申上ゲネバナラ無イノハ誠ニ遺憾デアルガ』ト前置キシ研究室ニ於ケル全原子核研究装置ノ撤収破壊ヲナス旨ヲ告グルト共ニ管理検討ノ必要アルニヨリ研究ニ関スル一切ノ文書、日誌、成績等ヲ提出センコトヲ求メ、ウラン並ニ重水研究用重要資料ノ提示ヲ要求セリ。・・・『研究設備ノ破壊撤収ハ必要無キニ非ズヤ。コレ等ハ全ク純學術的研究施設ニシテ原子爆弾製造ニハ無関係ノモノナリ』ト云ヒシニ『余等モ左様ニ思ヘド聯合軍最高司令部ヨリノ厳敷命令故コレニ従フヨリ他ニ道ナシ』ト述べタリ。前記マイケル氏ハ眼ニ涙ヲ浮カベ『科学者トシテカ、ル事柄ヲ科学者ニ申伝ヘル事ノ悲劇ヲ衷心感じ貴下ニ対シ誠ニ同情ノ極ミナリ』トノ意味ヲ述べ堅キ握手ヲナセリ。・・・」

これは数少ない荒勝自身の書いたメモとして科学史上貴重な資料である。

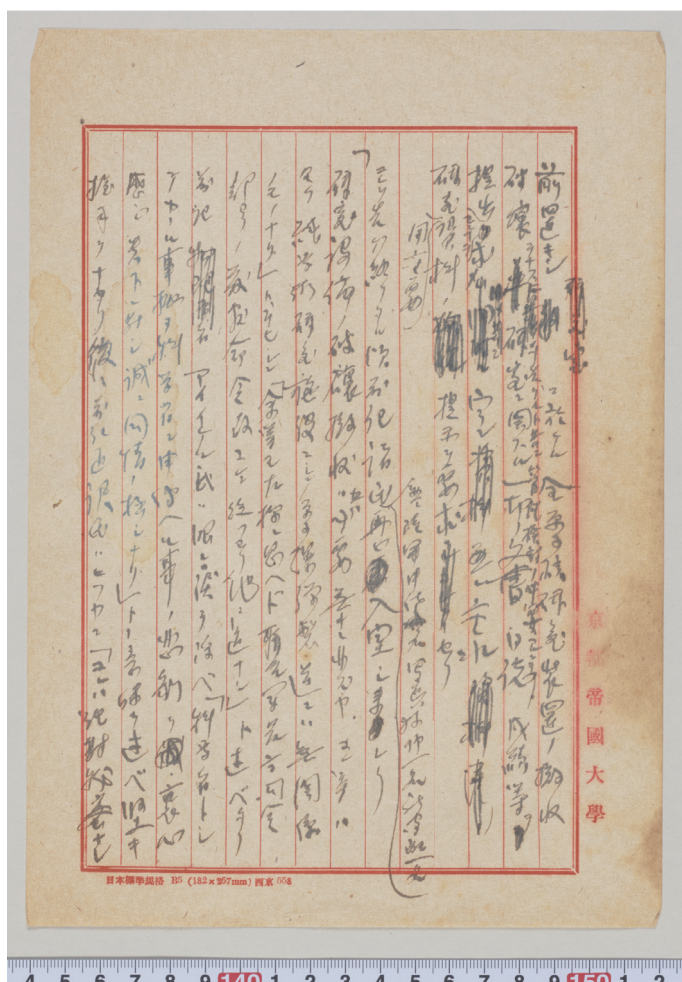
この時の通訳は荒勝の研究活動を侵害したことを後悔して、その直後米国への帰国を申し出る。帰国後、ハーバード大学で日本史を学び、後にカリフォルニア大学の教授となつて、日本の近代社会経済史の第一人者として活躍する。後年京大で

の出来事が彼の生涯に決定的な役割を果たしたことを告白する。

サイクロトロンの破壊直後京大の大学院生がマッカーサー司令官に送った抗議の手紙が最近ワシントンで発見され、話題を呼んでいる。数週間後、アメリカの陸軍長官がサイクロトロン破壊についての自分の誤りを公式に認め謝罪した。

なお、広島に原爆が投下された直後に荒勝らが広島から放出されたベータ線を測定、分析して、投下された爆弾が原爆であると断定した生データも寄贈された資料の中から発見された。これ等は京都大学が後世に残すべき貴重な遺産となろう。

(京都大学名誉教授 政池明)



資料は、B5判の「京都帝国大学」赤色野紙で全10枚（資料番号：箱1-1-1）。本文で紹介した部分は、2枚目の13行目より3枚目（写真）の4行目までと7行目より最終行6字目まで。なお、3枚目の開始部分は、本文翻刻「…前置キシ研究室ニ於ケル…」から。

総合博物館日誌（平成 26 年 11 月～平成 27 年 3 月）

展示

- 10月29日（水）～11月30日（日） 企画展
「学問の礎を受け継ぐ—文科大学陳列館からの出発」
- 10月29日（水）～11月30日（日） 特別展
「地の宝—百年を超える眠りからさめる旧制三高・京都帝大時代の秘蔵鉱物コレクション—」
- 12月10日（水）～1月25日（日） 特別展
「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて～」
- 1月21日（水）～2月8日（日） ロビー展示
「ふしぎな植物エンセーテ展 — エンセーテをめぐる人びとの知恵と創造」
- 2月11日（水）～4月12日（日） 第29回日本医学会総会 2015 関西 医学史展
「医は意なり — 命をまもる 知のあゆみ —」
- 2月18日（水）～4月19日（日） 特別展
「文化財発掘 — 京大キャンパス出土の埴輪 —」
- 〈他会場での展示〉
- 11月1日（金）～11月30日（日） 「大学は宝箱！京都・大学ミュージアム連携の底力 出開帳 in 東北」 於：東北歴史博物館
- 12月5日（金）～2月17日（火） 「科学開講！京大コレクションにみる教育事始」 於：LIXIL ギャラリー

レクチャーシリーズ

- 11月8日（土） no.129 マイクロフォンが捉える多様な音の世界 柳沢英輔（京都大学アジア研究教育ユニット研究員）
- 12月13日（土） no.130 生命科学と SF 八代嘉美（京都大学 ips 細胞研究所特定准教授）
- 1月17日（土） no.131 〈阪神淡路大震災から 20 年〉「東日本大震災からの生活文化の復興 — 人々の心をつなぐ “語り” と文化財の役割 —」終了後、ロビーにて東北学院大学学生による、文化財レスキュー活動のポスター発表 加藤幸治（東北学院大学文学部歴史学科准教授）
- 2月14日（土） no.132 明治時代、どんな実験で物理を学んでいた？ 永平幸雄（大阪経済法科大学）
- 3月14日（土） no.133 ガリレオ 望遠鏡で宇宙を観る 伊藤和行（文学研究科教授）

総合博物館セミナー

- 12月12日（金） 第66回 当館地理部門所蔵の台湾民族資料と寄贈者 古勝 亮（総合博物館教務補佐員）
山本浩史（総合博物館教務補佐員）

その他のイベント

- 10月1日（金）～3月31日（火） 第3回京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー
- 11月1日（土） 第9回ホームカミングディ
- 11月28日（金） 総合博物館ナイトミュージアム
- 12月3日（日） はやぶさ2打ち上げパブリックビューイング@京都大学総合博物館
- 12月13日（土）、2月21日（土） 京都千年天文学街道・アストロトーク、4次元宇宙シアター
- 2月16日（月） 京都大学総合博物館 分野間合同研究発表会

入館者数

7,477 名（うち特別観覧 84 団体 3,748 名）

発行日 2015 年 3 月 20 日
編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>